

其處で佛教とは如何なる事かと云へば、却々六ヶ敷しく、立派なる上人と雖も一言に説き盡す事は出来ぬが、兎に角人間の第一に大切な事は、生活問題である。此生活問題に對して兎も角動かぬ考へを起しさへすれば、生老病死の苦痛をも除去し得るであらう。佛教とは、此點に向つての決定心を養成するものであらう。果して然らば、人の生命とは如何なるものなるか。人の生命の存在は言ふ迄もなく、人間の働きと人間の精神とである。人間より人間の活動を去れば、人間の存在は無意味となる。次に活動と生命とは、如何なる意味のものであるかと云へば、前にも屢述べた事だが、釋尊も説法せられし如く、人間は久遠の昔から實在して居る。例へば佐藤鐵太郎は千年、萬年、億年も以前より居つたのである。夫れが機縁が圓熟して母胎内に宿りし時、初めて有限の生命となつたのである。然らば死ねば如何になるかと言へば、死後は元の無限の生命に歸するので、此點が人間として最も大切な處ではなからうかと思ふ、夫れで人間は死後働きが消滅すると云ふのは、疑

もなく嘘である。例へば釋尊は今日と雖も立派に生きて居られ、立派に活動して居られる。決して死滅しては居られぬ。私が斯くして種々の談話をして居るのを、釋尊は見居られるであらう。釋尊は始終働いて居られる。而して釋尊の事を考へれば、釋尊は直に茲に光臨され、一種崇高なる靈感を生じさせ、種々の事を教導せらるる。又同様日蓮上人も、生き／＼として出現になる。何人も同理で、往昔の孔子、耶蘇、和氣清麿、楠正成、大石内藏助、曾我五郎、十郎等も、皆正しく生き生きとして我々の心裡に、非常に強き力を以て働いて居る。何故かと云へば、足利尊氏の事を思考すれば、直に不忠不臣を惡む考へを起す。此活動が、人間の命であり、働きである。肉體を離れては、現世には何物も残らぬ、とよく云ふ事だが、夫れは誤謬の甚だしきもので、死體と雖も永久に存在する。如何なる古人とても、立派なる聖賢は常に我々に對して難有き説法をして居る。若し無根のものとするれば、我々の心裡に反映せぬ譯である。私がよく引例する事だが、「ゴム靴は力強く壁

に打ち付ければ、彈ね返しも亦強い。

神様、佛様、其他往昔より神として崇敬されし偉人でも、一心不亂に念じさへすれば、「ゴム鞠」の其の如く、強き反響があるであらう。釋尊も人生の眞意義を悟る目的に依り、王位を捨てて出家され、又日蓮上人の數度の流島になり、首の座に坐られし其苦艱の事を追想すれば、得も言はれぬ靈感に打たる、と同時に、表言し得ざる底力ある勇氣に充ち滿つる。此皆釋尊や日蓮上人の活動の今尙盛んなる證據で、即ち靈的生活の無窮なるを證するのであるが、不眞面目なる「ゴム鞠」の投げ方にては、佛を勸請し、以て教示を受けんとするは不可能であらう。而し壁あれば、返つて來るので、畢竟神佛の存在の意味が感應さるるのである。神様、佛様は、戀慕の心を起せば、同時に顯はれて、我々を説法教化する。釋尊でも、日蓮上人でも在世は甚だ短い、其短い間にされたる事業が、千年萬年の後世に傳承されて、偉大なる靈力を顯はすのである。

之れは獨り神佛のみならず、如何なる人と雖も、一大事業を成せる偉人傑人には皆同様で、例へば馬の如き畜生でも、佐々木高綱が宇治川にて乗り渡つた生月の如きは、些少なながらも世の人に若干感應する處があるので、總ては何物に依らず立派な功績に對しては、靈感を起すものである。

念佛を唱ふるのみでは極樂へは往けぬ

楠正成の大忠も湊川の一時に終つたとすれば、僅少なる忠義と云ふに過ぎぬが、爾來今日を經、千年萬年の後世迄も我國民を説法教化して、幾多の忠臣を養成し、立派なる奉公を盡さする處に偉大不滅の大忠が存するので、正成の生命の無窮なる意味も此點にある。此處である。果して然らば、我々小僧の申す事も、若し記憶され、ば、後來は偉大なる働きとなるので、我々は現世に存在中に、清き光輝ある生命を建設せねばならぬ。此清き光輝は、聽て佛であるので、現世に碌な事も成

さぬものが、五月蠅く念佛をとなへて、成佛させて下さいとか成佛させて下さるか
ら難有とか云ふのは、餘りに蟲が良すぎるではないか。

日蓮上人の言にも、妙法を信解して、佛法を行するものは、皆悉く極樂へ行
のである。日蓮上人より後に參るものあらば、何時でも自分は日蓮が弟子檀那
と名乗りを揚げて、堂々とやつて来いと、日蓮上人も言はれて居る位で、其條件と
しては各人々の心の正法を離れぬにあると述べられてある。

次に又我々の服膺すべき立派なる言葉がある『世法即佛法君父の爲に命を捨つれ
ば。釋迦多寶十方の諸佛必ず寂光の寶刹に護送したまふべきなり恐るるなかれ退く
なかれ』と言ふのである。此語は清正の兜の銘として傳へられて居るが、一天萬乘
の君の御爲め、父母の爲めに心命を捨てれば、如何なる事あるとも、極樂淨土疑ひ
なしの意味にて殆んど無限の積極的意味を含有して居る。妙法と云ふも、即ち世間
法である。道德に外れたる佛法は無いのである。現世に存在中、碌な事も成さず、

阿彌陀に絶れば必ず淨土に往生する等の考へは、如何にも我儘至極である。自己が
道德を重んじ、君父の爲めには心命も放擲する覺悟を以て、忠孝兩全を心懸れば、
疑ひもなく極樂往生を成し得るのである。併し極樂と云ひ、淨土と云ひ亦地獄と云
ふも觀じ来れば、娑婆世界其儘を云ふので、日蓮上人も『淨土と云ひ極樂と云ふも、
外には候はず、皆我等が胸の間に在り、之れを悟るを佛と云ひ、之れに迷ふを凡夫
と云ふ』と。斯く説いてあるので、善人の居る處は、至る處所謂極樂にて、尊い人
の居らるゝ處が極樂である。

尊き妙法を信じ、正道を行へば、其人の在住の場所は即ち極樂で、其處には釋尊
も、日蓮上人も居らるるが、罪ある衆生の集まる所は、皆悉く地獄である。假令
淨土に往生するとも、惡人が行けば其處は變じて地獄となる。

よく笑ひ話に話す事だが、極樂は西方に無き證據を云へば——三百代言の言ふ様
な事だが——往昔よりの善人は、一人として西方淨土へ行きしものはなく、皆此娑

婆世界に居る。法然上人としても、親鸞上人としても、皆此娑婆にあつて、説法教化に勤めて居らるるので、無名の人は何うか知らぬが、往昔より一人として、此娑婆世界に居られぬものはないのである。

親鸞上人と雖も、彌陀の浄土は我々の心の中にある。現世が即ち彌陀浄土である。娑婆即常寂光土とは、此意義なりと言はれし如く此點は何等の疑惑をも挿し挟む事は出来ぬが、途中にある迷想者は極樂と言へば、西方十萬億土より外に非ざる如く信じて居る。世の迷信者は弘誓の船に乗らざれば、極樂へ行かれぬが、弘誓の船は大船にして、人間の小さき罪障等は云ふに及ばず、如何なる大罪でも、五逆の重罪でも乗せて何等障害なく、決して沈没する事はない。而も南無阿彌陀佛を唱へて往けば、現在の罪などは何等障害なく、西方十萬億土の遠き浄土へ行かると言はれて居るが。實際現世其のものが極樂浄土である以上、斯かる遠き場所に往つて何をするのか、悪事を成さずに、此世界の浄土に正々堂々として在住して居らるるに、

夫れをも願はず、好んで遠き場所の往生を願ふとは、何んたる心得違ひであらう。

自己と神佛の結合を宗教と云ふ

私は、現世に生を求めたる以上、人の爲めになる事業を成し、跡から眺めても立派なるものになりたいのである。人間は現世に存在する期間丈けに於て、久遠の生命を造り得るので、死滅後如何に修業し、如何に佛に成らんとし、如何に人を助けんと望んでも駄目である。極樂百年の修業は、穢土一日の功に及ばずとは此處である。

娑婆世界に於て善事をなし、立派に成佛せずば、何の活動も此娑婆世界に殘す事は出来ぬので畢竟無益である。途中にある六道の辻とか、種々の凄惨場所に於て、其處で亡者共に説法し、成佛さすとも、此娑婆世界とは没交渉であるから、斯る事は何うでもよい。で現世に存在する間に、立派なる大活動を成し、其功德を以て

百年千年萬年の後世迄も、後人に説法教化すること始めて、我々人間の生を現世に求めし眞價があるので、此點に對する觀察によつて、始めて道徳と宗教との契結せらるゝ所以である。此點より推せば、如何にしても道徳と宗教とを契結せねばならぬのであるが、唯神佛の力に依頼せんとする結果、自己の成す事は、悉皆神、佛の成す仕業なりと考へ、終には念佛を唱へるさへ自己の力ではなく、佛が念佛を唱へさせるのである、而して念佛の力によつて極樂淨土へ往くのであると云ふ考へを起し、萬一斯かる考へを起しては、神佛は必ず我々を救済さるゝと確信し、報恩の意味より念佛を唱へなければならぬ事となる。裏面より此意味を見れば、善惡を論ぜず佛の仕業であつて、自己の努力は、全然無意味となり、従つて道徳觀念も消滅して、終には宗教と道徳と一致せぬ事となる。

又一方自力觀念より見れば、神佛の存在も畢竟自己の考へより起るので、自己を離れては、神も佛もなきと云ふ觀念を起すのであるが、此觀念の結果としては、

自己も佛も、自他の差別なく、結局神佛が自己の中に這入つて仕舞ひ、神佛と吾人の對立的關係は全然爲くなるので、煎じ詰めれば、宗教の意味を生ぜぬ事となる。而か己ならず、自ら惡平等とか、秩序破壊とかの觀念を生じて、殆んど社會主義者の如き感想を生ずるので、誠に危險極まる事となる。

元來宗教と云ふものは、自己と神佛とを結合したる觀念より生ずるもので、神佛と自己との對立關係が消滅すれば、宗教とは云へぬ。神佛の感應を確信せぬものは、決して宗教ではない。故に此點より判斷すれば、神佛を自己の觀念に内在せしむる純自力も、自己の仕業を全然神佛の力は内在せしむる純他力觀念も、畢竟宗教ではないのである。如何にしても自己の努力に對する神佛の感應を信ずるものにあらざれば、眞の宗教ではなく、即ち此意味より推せば、充分に自力を盡して佛力の感應を欽仰する所に、眞の宗教が存在する。

此點を最も八ヶ間敷しく説くのが、日蓮上人である。日蓮上人の教示によれば、

此自力と他力との關係を結合して、佛を信仰すれば、佛の感應が現はるゝので、例へば楠正成を欣慕すれば、忠義の觀念自ら湧起すると同理である。全體五月は思出多き月で、一昨日即ち二十五日は、楠正成が湊川で討死せし日であり、明二十八日は曾我兄弟の富士の裾野に於て、親の仇敵祐經を討つた日であり、五月十五日は日蓮上人の蒙古懲伏の爲め『曼陀羅』を書いた日と云ふ事である。蒙古襲來の二ヶ月前に當り『曼陀羅』を書きし事に就き、異説もあるが、之に就いて私は斯く信ずる。苟くも日蓮上人に非ずんば、著想と云ひ、文句と云ひ、彼れ程の立派なる『曼陀羅』は到底書けぬ。若し日蓮上人に非ざれば、日蓮上人以上の明賢とも言へる。又若し日蓮上人の門下が書いたとすれば、實に怪しからぬ事である。而已ならず大罪である。兎も角『曼陀羅』にあるものは實に立派なるもので、彼れ以上は日蓮上人に非ずんば到底書けぬと信じて疑はぬ。此『曼陀羅』が五月十五日で、又二十七日——即ち此日は我々國民として忘るゝ事の出來ぬ海軍記念日である。又此海

戦に於て戦死せし友人で、私を法華經に導いて呉れた人の記念日である。私に於て法華經を貰つたが、之れを讀むものは、賢兄の外なしと信ずるからお送りする。と云ふ手紙を添へて私へ送つて呉れた、海軍中佐松井健吉と云ふ友人の記念日である。斯く世の中に記念すべき日に、記念さるゝ如きよき事をなせば、例へば五代前の父は偉い人であつた、斯々の偉業をされた、我も負けてはならぬと云ふ處から終には大なる働きを成すに至る事となるので、法華經の壽量品にある不生不滅の大意義も一因其心戀慕乃出爲說法の意味も茲に在る。

宗教は積極的でなければならぬ

釋迦は千年萬年の往昔より無數億の衆生を說法教化され、何時にても說法教化される許りではなく、幾萬里を離れたる遠方と雖も、欽慕すれば、直ちに光臨し、説教される。楠正成を欽慕すれば、楠正成は直ちに飛び來つて教訓を垂れてくれ

る。此意味は「壽量品」中に、詳細に説かれてある、法華經の眞意義も亦茲に在る。
 私とは他宗教は、詳細に知らぬが、世間では宗教を悲觀的に見て居る様であるが、之れは消極的佛敎の流弊にして、之れが爲めに、現今も習慣となり、佛敎とさへ見れば、悲觀的に見る。此悲觀的佛敎は現世を穢きものであり、現世を嫌なもの如く教へたる爲め、多數の日本人は、現世を果敢なきものとして、鐘を敲き、滅入るが如き風を成し來つたのである。日蓮上人は斯かる果敢なきものとは教へられぬ。他宗教に於ては、鐘を敲くが、日蓮宗に於ては、賑やかなる太鼓をドンドコドンドコと敲く、尤も一貫三百とか云つて他人の安眠を防ぐるも頓着せず、十二時が一時になつても、團扇太鼓を不遠慮に敲くのは、餘り難有くもないが——世間では佛敎と云へば、一般に陽氣なるものに非ずして、陰氣なるものと認められて居るが、之れは佛敎の眞意義を知らざる似而非佛法に誤られし結果である。
 又或る派の思想家は、佛敎の旺盛を極めたる國は、衰微するが如く論ずるが、事

實は佛敎の盛大なる時代には、其國家も隆盛であつた。見よ。印度の現今の如く衰退せるも佛敎の衰微に従つて、思想の混亂を醸して、とうとう衰亡したのである。又我日本に於ても、佛敎の盛大なりし時代は國も盛んで、桓武天皇の御代が佛敎の盛んなりし時代で、又日本の盛んなりし時代であつたではないか。佛敎の盛大なる時代は、人心健實なる時代である。所が多くの人間は間違へて、宗教は不健實なるものであると云つて居る。信仰もなく、頭の定まらぬ人、思想の動搖し易き人等が、どうして立派なる活動が出来るものか。
 稻荷様等に願をかけるのは、宗教ではない。宗教とは、本尊が大切で、眞の如來、眞の佛に向つて一生懸命に「鞠」を投ずると、佛が力強く彈返して下さる様に、強く歸依するのが、即ち強烈なる佛敎的信仰である。
 私も佛敎其ものに對しては、餘り悉しくは知らぬが、只一心不亂に、眞の本尊に絶ればよいので、彼方にも、此方にも絶つては、何の效果もないと思ふ。丁度釣

魚と同理で、此處は釣れぬから彼處へ行けば釣れるかも知れぬ。彼處は駄目であるから此處は如何にと始終變るとも、決して釣れぬ。一心を込めて、此處なればと思つて釣れば、返つて釣れるのと同理である。宗教と魚とを一様の例に引くのは、一寸變であるが――。

人として最も大切なる一事は、前にも述べたる如く、最初の踏み出してある。最初の考への如何によつて、善惡の何れにも進むから、若し人が悲しき思想を以て進めば、悲觀的觀念を生ずる事となる。夫れて世を果敢なみて、無常觀、寂滅觀の部分的觀念に捉へられて、世の萬事を悲觀的に見るが如き、例へば同じ日を見るにしても、朝日を眺まずして、落日を見るが如き考へを持つ人と成つては、積極的思想を喚起する事は六ヶ敷い、苟も男子たるもの、斯かる事では駄目である。私は消極的悲觀的宗教思想は、何處迄も信ぜられぬ。日蓮上人は積極的である。悲しき事もなく、苦痛もなく、何度か佐渡ヶ島へ流されても、首の座に座しても、此苦痛は

決して、神の仕業にあらず、佛の仕業にあらず、只日蓮の使命が此厄難を造るものなりと信じたのである。今自分は「龍の口」に死すとも、命は妙法に捧げてあり、久遠の生命たる靈魂は残つて居ると、此れが日蓮上人の日蓮上人たる所である。首の座に坐する時、此れ程の欣びを興へかすと仰せられた。

併し日蓮上人は、決して虚飾の爲め虚偽の言を云はるる方ではなく、寒ければ寒い、暑ければ暑い、嬉しき事は嬉しく、苦しき事は苦しと云はれた。世の中には經文も碌に讀めぬ者が、如何にも悟り顔にえらさうな事を云ふ坊主共が多いが、皆嘘である。肉體としては、苦しき時は苦しく、寒き時に寒いに相違ない。此點に於て私は禪坊主は嫌ひである。禪僧が「心頭を滅却すれば、火も亦涼し」とか云ふが、皆虚偽である。火は熱いに極つてゐる。如何に悟ると云ふとも、斯る事を云ふのは面白くない。況んや其處迄も至らぬものが、利いた風の事を云ふのは彌々宜敷くない。但し此冷たい熱いと云ふ事も苦しいと思はぬと云ふ意味であらうが、果して然

りとせば、言ひ過ぎである。

日蓮上人は「鳥と蟲は啼けども涙落ちず、日蓮は泣かねど涙暇無し、此涙ひとへに法華經の爲なり、若し然らば甘露の涙とも申すべし」と言はれたる御趣旨こそ仰ぐ可である。而して總ての事に向つては滿身の力を注ぎ、總ての責任を負ふて身を投げ出され、自らどしどし進んで居らるる如く、總ての事が精力一杯に進むのである。斯くの如くにしてこそ初めて世法にも叶ひ、佛祖の遺教にも叶ふ譯であると信ずる。

宗教と道德は没交渉に非ず

然るに世の中の道德には没交渉で、唯々佛の有難きを云ひ、念佛を勵んで居れば、極樂に往くと云ふ事は我々は望ましくない、此世の中に鐘を敲く外何事も成さずして、畢竟何の功德が残るか、如何に消極的に考へるとも、釋迦は世間の道德と没交渉に佛法を教示さるる道理なく、如何に方便とは言へ、一宗の宗祖ともあるべき方

が、決して虚偽は言はぬ。皆其小僧共のい、加減なる事を云ふのであるが、日蓮上人の小僧共も間違つた事を言つては不可ぬ。眞の道を立派に世の中に示して、佛に歸依し奉り、一心不亂に信仰を捧げねばならぬ。而して神佛は何時、如何なる所にも居られ——假令御飯を食べる時、車に乗りし時と雖も——何時も佛は來られて、吾々を始終見て居らると云ふ觀念が大切である。

私 が幾度か云ふ事だが、大工が釘一本打つにしても、一心を込めて打てば、佛は之を照覽せられる。自分の打ち込む此一本々々の釘は、應ては父母妻子を安樂に養ふ功德が伴ふので、此一打の釘頭にも、立派に久遠の生命を宿すと云ふ心持ちを以てするのが、日蓮主義であり且つ又「壽量品」の本旨に適合するのである。此「壽量品」の本旨に適合する所に極樂があるので、何も十萬億土の西方にあらずば、極樂淨土にあらざるが如き説は、無根の事である。

日蓮上人曰く「法貴ければ人貴し、人貴ければ處貴し」と。斯くの如く極樂淨土

に入るべき資格ある人、即ち妙法を信仰する人の存在の場所は、何れにもあれ、極樂淨土である。

又曰く『夫れ淨土と云ふも地獄と云ふも外には候はず、我等の胸の間にあり、之れを悟るを佛といふ。これに迷ふを凡夫といふ』と。されば唯々欣求淨土といふも、厭離穢土と云ふも、娑婆即常寂光土の思想でなければならぬ。我等の努力を以て、此娑婆世界を莊嚴にし、立派なる極樂淨土にせねばならぬのである。

即ち現世より此世の中を莊嚴にし立派なる極樂淨土に成さんとする努力の上に總ての佛敎が存在するのであると思ふ。私は佛敎の眞隨の、日蓮上人の敎示に具備して、至らざるなきを信ずる者であるが、私自身は未だ日蓮宗に改宗せぬのである。

矢張り依然として、家は禪宗である。併し日蓮宗に改宗せぬのは、別に殘念ではない。日蓮上人を信仰して居るが、如何に日蓮上人を信仰するとも、宗派が、七つも九つも分れて居るから、何れの派にも入り難いのである。

併し日蓮上人を信仰して居る以上、日蓮宗に改宗せよと勧められもし私も這入らぬ事もないが、つまらぬ小僧共の言を耳にせぬ方が宜いから、私は僭越ながら、何派にも屬せぬのである、私の先覺と思ふべき人に、日蓮上人の遺敎を傳へて戴きつゝ、自ら研鑽し、僭越ながら日蓮上人の御直の御弟子の一人と考へて居るのである。

所が幸福にも、日蓮上人の一宗が漸く纏まりかけて來たが、坊さん達が損をするとか、財政が苦しいとか何んとか、損得の争ひとなり、或は感情の衝突となり、坊さんに有る間敷き汚き争ひを、今日も未だやつて居る向きもある様子であるが、之れは誠に情なき事で、夫れよりも寧ろ日蓮上人の御本旨たる大義名分を明らかにし、法國冥合の信念の上に大道を踏み行くこそ、日蓮上人の御本旨に相違ないので、何處迄も御國體中心の主義を執り日蓮上人の敎示に従ひて、奉公なしつゝ進みたいと思ふ。

九 予の見たる法華經

先帝陛下は御登遐あらせられてより以來、我日本國には不祥の事のみ多く、誠に以て痛嘆の至りである。

『衆生病メバ 則菩薩病ム。衆生ノ病癒ユレバ菩薩モ亦癒ユ。又言フ。是疾何ノ因起スル所ゾ。菩薩ノ疾ハ大悲ヲ以テ起ル。』

(維摩經)

先帝陛下の御大患は實に此意味であらせらるるので、我等臣民にして、一たび御國體の靈光に觸れ、近來推移する思想の健全ならざりしを悔悟し、速に思潮の亂流を規し何事にも眞摯なる國民となつたならば——假令、一朝にして其結果を示すこと能はずとするも、もし眞實に悔悟の情を起したならば——先帝の御大患は必ず御平癒あらせられたであらう。もし臣民一同が、一心に御大患の御平癒を祈念申上

ぐるならば、先づ第一に自己を悔悟せよ。先帝陛下は必ず之を御嘉納遊ばされ速に御平癒遊ばすであらうとは、當時に於ける私の所信であつたが、我等同胞の熱誠なる祈念も終に御聽許あらせられず、悲しくも御登遐あらせられたのである。かくて限りなき悲嘆の裡に、先帝陛下に御分れ申上げたる國民は、一時非常に落膽し、一種云ふべからざる悲痛を起し、限りなき戀慕の心を以て御追慕申上たのである。法華經に、

『是時、諸子父背喪セリト聞キ、心大ニ憂惱シ而シテ是念ヲ作サク、若シ父在サバ我等ヲ慈愍シテ能ク救護セラレン。今ハ我ヲ捨テテ遠ク佗國ニ喪シ給ヒヌ。自ラ惟ルニ、孤露ニシテ復タ恃怙ナシ。常ニ悲感ヲ懷イテ心遂に醒悟シ、乃チ此藥ノ色香味ノ美ナル事ヲ知リテ、即チ取テ之ヲ服スルニ、毒ノ病皆癒ユ、(毒量品)とあるは、今更ながらひししと身に感じたので、悲痛の内にも、我等同胞が此の大不幸の爲に覺醒し、不健全なる時代思潮を轉流せしめ、一舉して立派なる大日本

國民となるであらうとの冀望を起し、及ばずながら、從來の混濁したる思想を清め、彌々益々御奉公に勉めんと決心したのであつたが、悲しい哉、我同胞は意外にも軽浮なる國民であつた。彼等の心中には疑ひもなく、先帝陛下の御登遐により、大教訓を感得したには相違ないが、これを思ふこと眞摯ならず、世道人心は日を逐ふて彌々益々盪壊し去らんとしつゝあるのである。成る程、御諒闇中に於ける國民の風俗は、一時少しく引きしまつたのであつたが。これは悉く虚偽の行爲で、色々、世間體を装ふ爲の一種の虚榮心の轉化であつたので、諒闇後は、一層浮華なる、しかも淫靡なる風俗となつたのである。獨り風俗のみならず、國民の精神もいたく麻痺し、何事も極端なる色彩を帶ぶるにあらざれば、満足せざる底の傾向を示し、我日本國體の精華にして、我道德の本幹たる思想の上にも、驚くべき惡變化を來し、政治上の罪惡も公然と行はれ、大義名分すら辨へざるものあるに至つたのである。しかも巧言令色の徒は、心中自ら自己の汚濁を感じながら、或は言辭を以て、

或は文章を以て己れの陋劣なる思想と行爲とを修飾塗粉し、これによつて世人を惹き去らんとするものが多いのである。餘國はしらず、我日本に於ては、政治的事をまつりごとと稱するので、此言葉の内には、祭政一致の意味もあるのであるが、我國の政事は必ずこれを神前に於て開かるべく、其の處に出入する人々は、先第一に神前に拜伏して心中のけがれを去り、神鏡に照して其の心のくもりなきを證し、極めて眞摯なる心持を以て、國事を執掌せなければならぬのである。然るに今日の有様は、全く是れに反し、政事を一種の懸引と心得、縦横家とも、權變家とも稱すべき態度資格を以て政事家を品隔するに至つたので、従つて政事は神聖なる政廳に於けるよりも、寧ろ紳士の公然と出入すべからざる底の場所に於て行はるる事を常とするに至つたので、是れは如何にも憂ふべき事と謂はざるを得ぬ。加之、先帝陛下御登遐以來、天變地異連りに起り、或は火山の爆發となり或は大河の汎濫となり、大風となり、飢饉となり、到る處大なる損害を受けざるなく、疫癘もまた各

所に起り、彌々人心を騒がし、そらろに安國論時代を思はしむるのみならず、日蓮上人が、

「國土亂れん時は先づ鬼神亂れ、鬼神亂れる故に萬民亂ると。今此の文に就いて具に事情を按ずるに、百鬼早く亂れ、萬民多く亡びぬ。」（顯立正意抄）

と喝破せられたる御風貌を想見し、大偉人ありて出るにあらざれば果して我國家を如何せんとするかの嘆聲を發するに至つたのである。我同胞國民は果して先帝陛下の殘したまへる良薬をとつてこれを服し、毒の病を醫すること能はざる程に、精神的麻痺を起しつゝあるであらうか。御登遐あらせられたる當時は、如何にも望ある人心の傾向を示したのであるが、一ケ年もたつやわたらずに、又々以前にも増して憂ふべき状態に陥つたのである。私は、引續き、昭憲皇太后陛下の御崩御に會し、御即位の大典をすら拜すること能はず、已を得ず、御繰り延の事に御治定あらせられたるを見て、一層悲痛を覺え、我等國民に對する御諫曉の、如何にも峻烈なるに

戰慄しつゝあるのである。我等同胞は如何にするも覺醒する事が出來ぬであらうか。諦かに皇國の天職を自覺し、立派なる人格を備へたる國民となるべき資格がないのであらうか。

我同胞は、果して御稜威の發展統一を翼賛し奉るべき能化の選民として永久に嚴存すべき資格を有せぬであらうか。私は法華經の所説を拜し、ソゾロに感慨の情を起さざるを得ぬのである。

「諸子幼稚ニシテ未ダ識ル所アラズ、戲處ニ戀着セリ。或ハ當ニ墮落シテ火ニ燒カルベシ。我當ニ爲ニ怖畏ノ事ヲ説クベシ。此舍已ニ燒ク、宜ク時ニ疾ク出テテ火ニ燒害セラレシムルコトナカルベシ。是念ヲナシ總テ、思惟スル所ノ如ク具サニ諸子ニ告グ汝等速ニ出デヨト、父憐愍シテ善言ヲ以テ誘諭スト雖モ、而カモ諸子等嬉戲ニ樂著シテ敢テ信愛セズ、驚カズ、畏レズ、了ニ出ル心ナシ。亦復何者カ是火、何者コレ舍、何カナルヲ失フトナスヲ知ラズ。但東西ニ走り、戲テ

父ヲ視ルノミ。(警諭品)

私が雑誌『法華』の開刊に際し、管轄ながら一閃の火光に久遠の生命あり、チ
ヨークの一刷に不滅の精神を宿す。』云々の祝辭を呈したるのは、現下に於ける我同
胞の麻痺したる國家的思想を喚起し、兩陛下の下し賜へる御諫曉をして、彌々益々、
光輝あらしめん爲めの良薬は法華經を措いて他に求むる能はずと確信せるの致す處
である。

一言を以て廣大深遠なる法華經を解釋せんとするが如きは、如何なる偉人と雖
も、到底不可能である。況や、私如き剪劣下根の士の望むべき處にあらざるは無
論である。去乍、富嶽の崇高なる雄姿は、如何なる偉人も、如何に蠢愚なる兒童も、
これを見ること同様でなければならぬ。飾りなき真心を以てこれを見れば、決して
間違ふことはないのである。雲に覆はれたる富士を見て、眞の富士を判断するは、
如何なる聖賢と雖も難しとする處であらうが、雲なき折りは、如何なる愚婦愚夫と

雖も、明かに其の形を認めて誤りなきを得るのである。この點より考察すれば、富
士の真相を見得るには、一に境遇によるので、必ずしも眼光の鋭鈍を以て論ずるこ
とが出来ぬ。

果して然らば、如何に迂愚なる私と雖も、如何に廣大深遠なる法華と雖も、必
ずしも其の心髓を瞥見し得ざるにもあらざること無論である。只唯境遇と思想の向
ふ處により、能不能の區別を生ずるのみである。

私が法華經を讀んで、ひし／＼と身に染むのは、先第一に壽量品である。

『我レ成佛シテヨリ已來、復此ニ過タルコト百千萬億那由陀阿僧祇劫ナリ。是ヨ
リ來、我常に此娑婆世界ニ在テ說法教化ス。亦餘處の百千萬億那由陀阿僧祇ノ
國ニ於テモ衆生ヲ導利ス。』

『慧光照スコト無量、壽命無數劫ナリ。』

等の聖訓に接する毎に、一閃の火光にも、一刷の『チヨーク』にも、無窮の生命あ

るを得得せざるを得ぬのである。成程、一閃の火光は刹那の視覚に觸るるに過ぎぬのであるが、決して其の儘に消え去るものではない。閃光を發したる事實は、決して閃光と與に消えるものではない、況や、其の閃光を發したる緣因を探求すれば、如何に高遠なる智見もこれを極むること能はざる程、不可思議底のものとなるのである。既往は無始、未來は無終の生命を有し、何時までも、残るのである。

『チヨーク』の一刷は、消護謨の一擦に逢ふて消えるのであるが假令形では消えるにしても『チヨーク』を以て一刷したる事實は、無窮に不滅である。もしも『チヨーク』を手にする畫工が、どうせ消すのであるから、どうしてもかまはぬ。と云ふ精神を以て、『チヨーク』を用ゐたならば、決して千古に傳ふべき名畫を得る事が出來ぬ。これ等の點から考へて見れば『チヨーク』の一刷は、やがて滿幅の大畫の全精神を示すべき運命を以て生れたので、決して消護謨の一刷に逢ひ、全生命を失ふべきではないのである。釋迦牟尼如來が、今日尙此娑婆世界に嚴存せられて、日々夜々不

倦不息衆生を濟度しつゝある如く、兩陛下の御神靈も、正に此日本國に嚴存せられて、我々國民を御指導あらせられつゝ、あらせらるるのである。もしも兩陛下に對し奉り、無限の戀慕を以て御追慕申上たならば、兩陛下の御聖靈は、至る處躍如として出顯せられ、毒惡の疾病を治し、健全なる國民思想を起すに至らしめたまはんこと明瞭なりと、私は信ずるのである。故に我等同胞が、此『不滅』の信念に立ち、譬へば釘を一本打ち込むにも、この釘を以て我大日本國を打ちかたむるものである。此一本は無限の生命を以て萬古に嚴存するものである。假令年と共に腐鏽しても、この一本の釘を打ちたる行爲には、無窮の生命がある。私は此一本の釘を以て、我作品に不滅の生命を賦與するのである。私は我大日本國を打ち堅むる精神を以て、またこれを無窮に傳へん精神を以て、此釘を打ち込むのである。との心的大獅子吼を以て打つならば、假令如何なる場合と雖も、決して間に合せの事を行ふべき心持を生ぜざるは勿論、萬事眞面目に業務に従事するので、姦商に欺

かれて我國民の信用を失墜するが如きこと決してこれ無きは萬々である。

更に退いて、是等の意味を『今此三界』の聖教に融合せしめて考察するときは、
『今此三界ハ、皆我有ナリ。其中ノ衆生ハ、悉ク是レ吾子ナリ。シカモ今此處
ハ諸ノ患難多シ。唯我レ一人ノミ、能ク救護ヲナス。』(譬諭品)

如來は三界の主にして萬民の親である。萬民の親であると同時に、迷路より導いて正道に歸せしむるの師匠である。しかも主師親の三徳を具備するものは、唯一人の如來である。而かも此如來は常住不滅の如來である。如來は我等衆生の爲めには、常住不滅の靈徳を具ふる唯一の君主で、是また一人の慈父である。慈父であると同時に、恩師である。王佛一如、法國冥合の大理想も此の見地より生ずるので、常住不滅の意義なく、或はまた主師親の三徳に於て缺くる處あるの君主に主裁せらるゝ國家は、到底法國冥合の意義を全うする事能はざるは勿論であるが、それと同時に、常住不滅の意義と、父母たり、恩師たるの資格を具備せざる君主は、王佛一

如の意義を全うすべき君主ではないのである。

然るに、我大日本國は幸なる哉、立派なる王佛一如の君主を戴き、法國冥合の大意義を満足すべき國である。それと同時に、唯我一人の意を以て世界を統一し、一大王國となすべき天職を有する國家で、其の國民は此天職に對して、殊に奮闘して御奉公申上ぐべき國民であるので、日蓮上人が慈父王敵とならん、父を捨て、王に參るは孝の至り也。と迄、喝破されたる忠孝主義の本源も又茲に存するのである。我帝國の天職遂行に關する、我等同胞國民の信念は、固より堅實なるを要するのであるが、此點に對する解釋は暫く措き、苟も此天職を全うせんが爲め我等國民の服膺して修養すべきは、提婆品に存する聖訓である。提婆品の本義は私に見る處によれば、『皆因提婆達多善智識故』の十字に盡されて居るので、提婆の本地は、決して佛敵ではなく、佛道を成就せんが爲め顯はれたる仙人である。佛在世のときに佛道を成せん爲、かたき役者として顯はれたので、足利尊氏が、

其惡逆を以て後世の訓戒たる楠正成の精忠を助成せると同様である。決して、本來より惡むべき人物ではない。況して釋尊は提婆を以て善智識と見て是を讚嘆し、終に『却後過無量劫當得成佛號曰天王如來』云々といはれて居らるゝのである。此點から考へて見ると、惡逆無道の人の世間に存在するは、人生といふ大舞臺の上に、敵役をつとめるが如きもので、其の惡業の惡むべきは、萬世に涉つて變らぬにもせよ、其の人に對しては、唯々御氣の毒といふの外はないのである、畢竟、法華經の唯我一人の如來は、決して佛魔兩立の佛ではない。魔と戰ふべき佛は絶對ではなく、明かに相對である。此の點より觀察すれば、魔のはたらきは絶對唯一の本佛の主義する、佛界の一波瀾として認むべきものである。

右の思想より判斷すれば、惡人に對する嫉惡の情は忽ちにして慈の心に變ずるのて、期せずして、惡人と雖も佛性あり、三界萬靈悉く佛種なりとの思想に到着し得るのである。況や、罪もなき他邦の人の如きは、固より同一佛界の一人として之

に親むべく、王佛一如の見地より見れば、悉く是我皇の赤子である。『四方の海、みなはらからと、思ふ世に、など波風の立ちさわぐらん。』とお詠み遊ばされたる先帝陛下の大御心を、遺憾なく此思想を顯はすもので、この點より進んで考へれば、常不經菩薩の出世の意義は、比較的明瞭である。

常不經菩薩品に、

『是比丘、凡ソ見ル所アル、若ハ比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷ヲ、皆悉ク禮拜讚嘆シテ是言をヲ作サク、我深ク汝等ヲ敬ス、敢テ輕慢セズ。所以ハ何ン、汝等皆菩薩ノ道ヲ行シテ當ニ作佛スルコトヲ得ベシ。而カモ是比丘專ラ經典ヲ讀誦セズ。但禮拜ヲ行ズ、乃至遠ク四衆ヲ見テモ、亦復故ラニ往テ禮拜讚嘆シテ是言ヲ作サク、我敢テ汝等ヲ輕メズ、汝等皆當ニ作佛スベキガ故ニト四衆之中、瞋意ヲ生ジ心不淨ナルモノアリ、惡口罵罰シテ曰ク、是无智ノ比丘、何所ヨリ來テ自ラ我汝ヲ輕メスト言テ、我等ガ與ニ當ニ作佛スルコトヲ得ベシト授記スルヤ。我等

是ノ如キ虚妄ノ授記ヲ用キスト。如此多年ヲ經歷シテ常ニ罵罰セラルレトモ眞意ヲ生セズ。常ニ是言ヲ作ス、汝當ニ作佛スベシト、是語ヲ説ク時衆人或は杖木瓦石ヲ以テ之ヲ打擲スレバ、避ケ走り遠ク往テ、獨リ高聲ニ唱テ曰ク、「我敢ラ汝等を輕メズ、波等皆當ニ作佛スベシ。」云々

とある如く、常不輕菩薩は、如何なる佛敵にも、如何なる惡人にも、また八才の龍女の如きつまらぬもの迄も、皆悉く佛種がある、故にもしこの佛種をおほし立てさへすれば、皆悉く成佛すべきものである。如何なる惡業を成するものと雖も、其の心中には玲瓏玉の如き佛種があるので、常不輕菩薩は、此佛種に對して敬意を表するのである。若し我等日本國民同胞が、此常不輕の心を以て心としたならば、假令如何なる人にも、侮蔑の心を以て見るが如き事あるべき筈がないのである。北海道のあいぬ人も、臺灣の生藩人も、朝鮮滿洲にある無智の賤民に對しても、皆悉く侮蔑の心を去るべきである。

法國冥合の大意義を有する我日本の國民は、心に唯我一人の靈徳に感孚し、常住不滅の大意義を悟り。皆因提婆善智識の聖教を體し、常不輕の行を行じたらば、我帝國の天職を遂行する所以の道に合すること疑ひなしと、私は信ずるのである。法華經の妙趣を全然會得し、身を以て法華を行するが如きことは、我等如きの分際、企て及ぶべきではない、併し法華經の慈悲は廣大深遠である。藥草喻品に、『我レ法雨ヲ雨シテ世間ニ充滿ス、一味ノ法ヲ力ニ隨ツテ修行スルコト、彼ノ叢林藥草諸樹ノ其ノ大小ニ隨ツテ漸ク増茂シテ好キガ如シ。』

とある如く、法華の法雨は一味であるが、これを受くる草木の機根により、或は藤となり、牡丹となり、菊花となり、櫻花となり、山川草木悉く其の受くる處に従つて、相當の利益を享くる如く、我が見たる法華經の利益は、必ずしも他の人の見たるものと同一視すべきではない。また必ずしも同一なるを要せぬのである。先帝陛下の御登遐に際し、壽量品の所説に感嘆して涕泣したる當時を思へば、法華經

の如何に深密に如何に剴切に、其の理想の、如何に高遠に、如何に實際に適切なる哉を讚嘆せざるを得ぬのである。されば佛以一音演三說法一衆生隨類各得解。と云ふが如く、敢て必ずしも全部といはず、法華經を讀誦して利益を得る事極めて廣大である。私は到底法華經を説くの機にあらず。また其の人にあらざる事無論であるが、極貧の人一食を得たる後、食器を洗ひ、其の滌汁を施すも、また福を得との佛説あるが如く、これまた菩薩の行を行すものと信ずるのである。世人として私の所説の如く、法華所説の大意義を服膺したならば、輕浮なる現代の思想を一新し、眞面目なるしかも元氣旺盛なる國民性を爲し、大工が一本の釘を打込むにも、日本國を打ち堅むるの精神を宿し、畫工が下繪を作るにも燒筆の一刷の爲毛の一抹に逢ふて消盡し去るを思はずして、無限の生命を宿すと悟つたならば、如何なる事業に對しても、堅實なる基礎を與へ、決して粗製品を濫製して、一時の利益を貪り、是が爲日本國の名譽と信用とを墜とすが如きことなく、同胞互に其の業を敬し、相

愛し、相佑け、以て國運の進歩を圖るは勿論、如何に縁遠き異邦の人と雖も、我帝國の天職を思へば、皆是れ未來の邦人たるべき種子を有すること、假令ば、三界萬靈の、悉く皆菩薩の道を行して成佛するが如くなるを悟らざるを得ぬのである。しかも其結果は、常住不滅の大意義を悟り、進んでは、法國冥合の意具に我國に満足するを曉り、皇徳の崇高に、皇道の幽遠にして無疆なるを拜し、退ては事を處するに眞率にして經浮の念なく、百事堅實を主として欺罔の念なきに至らん。加之、明に佛魔兩立の謬見を破し、秩序ある博愛の心を成し三界の萬靈悉く一傘の下に統一せられて、悉く成佛するの盛觀を見るに至らん。私は、一念茲に及べば、法華經によりて享くる處の切徳の甚大なるを憶ひ、心に大歡喜を起し、自ら讚歎の涙の滂沱たるを知らざるのである。

十生活と道德

日蓮主義者と宗論

宗論といふ能楽狂言がある。之れは日蓮宗の坊さんと浄土宗の坊さんとの争論を仕組んだものであつて、却々面白い處がある。日蓮宗の僧が身延山に参詣し、また浄土宗の僧が蓮馨寺に参詣して道連となつた。然るに日蓮宗の僧は、同伴するのがうるさいと思ひ、途中から逃げ出さうとして居た。其中に珠數を戴かせる事になつて、一方は之れは日蓮上人の珠數だから戴けと云ひ、之れは法然上人の珠數だから戴けと互に争つた。日蓮宗の僧は、堪へかねて遂に逃出して了つたが宿屋に泊つて居ると又浄土宗の僧が追蒐けて来て、同部屋に合宿となつた。夫れから二人の間に宗論が始まる事になつた。狂言であるからたわいもない宗論であるが、先づ日蓮宗

の僧が云ふには、五すいでんぐ、隨喜の功德又は涙と佛の説かせられた法門がある。此法門は如何なるものかと云へば、大地を掘つて芋を植ゑると立派に成長した。夫れを刃物で切つて辛子であへる。即ちずいきの芋の料理して人に食はせると、皆有難がつて涙を流すからずるき(隨喜)の功德又は涙である。浄土宗の僧は之れを聞いて、御坊の法門は夫れ位のものか。自分のは一念阿彌陀佛即滅無量罪又は菜とも説かせられてあつて、一念阿彌陀を唱ふれば、無量の罪が悉く消えるといふ意味である。夫れは如何なるものかと云へば、鞍馬の木の芽漬、はんべん、麩、椎茸の如きものを集めて、其れをお菜とする。餘り錢を出さぬ者には鹽焼一菜で下さるが、彼の無量の御菜、無量罪即ち澤山のお菜を食はせるといふと、人々は皆悉く有難がる。何と有難き御法門ではないかと遣り返す。

其中に浄土宗の僧がもう勤行の時が来たとして、カン／＼なまいだ／＼を始めた。日蓮宗の僧も之れではならぬと、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と始める遂に踊

り念佛となつて踊り出す。すると夢中になつた二人は相互に間違へて、浄土宗の僧が蓮華經々々と唱へ日蓮宗の僧がなもうだくと唱へた。聽て兩人共氣が付いて、成程之れは考へて見ると阿彌陀も法華も同じ事である。今より兩人の名を妙阿彌陀佛と付け様と云ひながら、狂言の終りとなるのであるが、之れは何か諷刺かも知れぬ。即ち斯くの如く自己の本領までも忘れて了ふやうではならぬと云ふ一種の諷刺狂言ではないかと思はれる。

生活と道徳

「生活と道徳」此の問題に付いて、日頃確信してゐる所を述べて見やう。生活とは如何なる意義か。是れを八ヶ間敷く言へば、如何なる事か知らぬが、兎に角讀んで字の如く、生命と活動とである。吾人の命は活動である。活動のなき者は、既に生活の意味から離れた者である。而して我々が等しく法華經を難有く思ひ

讀誦する間に、自然感應する事は、生命の無窮なる事である。此の無限の生活が吾人の母胎内に宿る時には既に有限生活の意味を帯びて、十ヶ月間の經過後出産する事になる。而して出生する時は、果して苦痛であつたか、快樂であつたか至つては、誰にも不明であるが、出生の際、泣く處を見れば、或は苦痛であつたかも知れぬ。而し兎に角、其の點は不明としても、所謂私の確信する有限の生活は、其のときに始まつたのである。而して此處に我々は皆現世の有限生活を營みつゝあるので、又時が来れば、必然の道理として我々は死ななければならぬ。此の死と共に現世の有限生活が消滅して、又元の無限生活に歸るのである。斯く考へ来れば、何となく人間としての總てを理解することが出来るらしく思はれる。此れは極めて鄙見ではあるが、此處に眞理の或るものが潜んで居るに相違ない。つまり久遠の生命換言すれば無限の生命なるものの意義の有無を正すとすれば、此れは無論存在を認むるに何等の疑を挿し挟む餘地は寸毫もない。私が常に語る事だが、往昔の英雄

豪傑と云はるる人々は、死んでから今日迄、何百年の星霜を經過して居るけれども今日尙現在して大なる活動を行ひつゝあるので、孔子様は、二千餘年前に死寂せられたが、現今迄孔子様が、生を保つて居らるる所謂此の久遠の生命なるものが、吾人に大なる影響を及ぼして、我々に大なる力を興へて居る。畢竟、お釋迦様と云ひ日蓮上人と云ひ、皆今日當に我々の近邊の何處にても現在せられて、我々に對し微妙の法を説かれつゝ、大に活動をして居らるゝのである。

佛様に縋つても極樂へは往かれぬ

其他往昔からの聖賢偉人、悉く我々に向つて、大なる活動を爲しつゝ、我々の精神を導き、併せて總ての行爲の模範と成つて下さる。

其處で我々が、此の現世に生を續けて居る間に努力奮勵すると、其努力奮勵が、久遠の生命に大なる光輝となつて現出して來る。

何にもあくせく現世に於て努力奮勵せずとも、久遠の生命が有るから宜いと思ふが、現世の行爲が久遠の生命に現出するので、其處に何等光輝なき久遠の生命とて保持される事となる。

假令水を一杯飲むとしても、之れに由つて吾人の身體を保養し、之れに由つて吾人の國家の爲めに盡瘁する事が出来る、一つの働きてである。斯く考へて來たならば、現世に於て爲す總ての行爲、つまり一瞬時に行はれたる事、人の見ぬ事と謂ふも、此等の行爲には、必ずや無限なる意味合、無限なる活動を爲して居ると私は考へるのである。

義者ではなく、又不眞面目になれば、既に日蓮主義者ではないからである。自分は間違つた事を色々するが、佛様の名前を唱へて、而して感謝の意を表すれば、極樂往生疑ひ無しと思惟して居るものもあるが、斯る心得違ひのものは我が日蓮主義者にはない。而し世の中には、大分斯かる人が多いやうだ。此等は、如何にしても我々日蓮主義者が、直してやらねばならぬ。つまり我々日蓮主義者が考へて居らねばならぬ事は、何事に依らず、努力奮闘を以て久遠の生命を作り上げねばならぬ事にあるから、依頼心を起しては不可ぬ。何處迄も自分の力を以て、自分の力の光輝を死んだ後迄も遺し、斯くして偉大なる人間として、萬世不易の生命を形造らなければならぬ。

眞の日蓮主義者の在住所は何處でも極樂である

一笑話の如き事であるが、極樂往生と云ふ事は、無論現世に存在するもので、日

蓮主義者は、始終教傳せられつゝある。つまり其の人さへ貴ければ、其在住の場所は問はずして貴いのである。妙法を信じて行ふ人があるとすれば、其の人の在住の地は、何處でも貴く、且つ何處でも極樂の地である。決して西方浄土とか云ふ處に限つて、極樂の地ではない。其れは、浄土眼を以て觀る所の宗派と雖も、矢張り吟味して觀たならば、西方浄土に限つた事はないのである。

現世に極樂浄土は、確かに存在してゐる。而し現世を捨て、極樂浄土に往くことを求める。即ち穢土を厭離して浄土を欣求するが如き意味は、洵に面白くない事である。

之れは決して浄土宗攻撃と云ふ譯ではないが、此の考へは如何にも面白くない。何故ならば、極樂浄土を西方にのみ存在すると觀れば、私の確信したる、久遠の生命の意義が消滅する、往昔からの偉人は澤山あるが、其等の偉人が皆娑婆世界に在て一人でも極樂へ往つて居る人はないのである。

果して極樂淨土なるものが、此の穢土以外の地に存在するとすれば、重ねて言ふ往昔からの偉人は一人として、極樂へ往つた人はないのである。如何となれば、お釋迦様でも、耶蘇でも、孔子様でも、始終我々の側に居られて、我々と共に大なる活動を行つて居られる。若し西方の極樂淨土と云ふ處に其等の人々が往つて居られるならば、此方に居られぬやうな心持がする。極めて卑近な話であるが、何うも然う思はれてならぬ。

其處で若し此の久遠の生命の意義を考へて居れば、此の世の中に何時迄も遣つて居るもので、決して此の世の中に無い處に向かつて、自分の淨土を求むると云ふ事はない筈だ。然うして現世に於て悪事をすれば、又善事ならぬ事をすれば、千年經るとも、萬年經るとも悪人として遣り、不義を行へば、千年經るとも、萬年經るとも不義の者として遣る、立派なる事を行へば、千年萬年經るとも、其の人は立派な人として遣る。其處に久遠の生命の意義の存在ありて、光輝を放つのである。

久遠の生命と道德

斯かる立場より、我々の日常生活を觀たならば、其處に大なる道德のあるを知るであらう。如何なることが道德であるかと、今更別段に言ふ必要はないが、何事を爲すとも總べて不滅の命を有して居るから何事を行つても拭ひ消すことは出来ぬ。又後日に至つて拭ひ消すことが出来るからとて、苟且なる事を行ふ事も出来ぬ。一寸汚れが附いたから洗へば宜いだらうと云ふ考へならば、其れは全然意義が相違して居る。洗ひ落しても一度手を下したる其の事には、久遠の生命がある。唯それを後の行き様に依つては、赦される事が出来ると云ふ丈に止まつて、悪事は矢張り悪事として遣る。斯る考へを持てば又其れと同時に往昔からの偉い御方——我々の方で云へば、日蓮上人——日蓮上人も常に此處に居らるゝ、何日でも居らるゝと云ふ事を考へて、自分の行ふ事は、善事悪事を論ぜず、何時にならとも消滅せぬ所謂、

無限の生命があると深刻に考へて居れば、世の中の總ての道徳が、此の一點で成立するであらうと思ふ。動もすれば、道徳の徳目を考へて、斯う云ふ時には、斯うしなければならぬ、あゝ云ふ時にはあゝしなければならぬ又斯くあるべきであると云ふ如く、忠孝仁義禮智信と云ふ風に、種々説明すればとて、今述べた久遠の生命があると考へずに、之れを行へば、何にもならぬ。誠の眞心と云ふべきものは、久遠の生命と云ふ觀念に宿るものであると考へなければならぬ。

畢竟生活と道徳とは立派に關聯する處がある。其の關聯する點は如何なる事であるかと云へば、即ち久遠の生命である。何時になつても消滅せぬ生命の存在にある。縱令一時の彌縫に依つて旨い具合に事が纏まつたにしても、相互とも満足して總ての事が成立したるが如き事があつたにしても、其の間に、若し何等かの間違つた一點さへあれば、又穢い微點さへあるとすれば、其れは、決して正實の事とは云はれぬのであるから、斯る事を成す人は、よし一時成程立派なる賢人の如く、又聖

人の如く見えたにしても、よく這込んで見れば、意外の缺點が発見されるのである。斯る缺點があつては、所謂久遠の生命上に於て其苦痛から絶離する事は出来ぬ。其の苦痛は、千年經るとも、萬年經るとも、不斷に存在して行くのである。

法華經と御遺文の感應

甚だ混雜しましたが、私の以上述べ來つた生活と道徳とに付いては、大體斯んなものである。此意義を能く日常から服膺して、生活と道徳と云ふ問題が理解出来はせぬか、此れは私一個で唯ださう述べるばかりではなく、私が法華經を拜讀して又日蓮上人の御遺文を拜して居る内に不知不識、自ら斯る考への湧き出るのである。諸君としては或は何等共鳴する事もなく、唯だ何でもないやうに思はれるかも知らぬが、私には熟々さう考へられるのである。何うかして斯う云ふ風にして行きたいと思ふのである。何事を成すに當つても、總て久遠の生命がある、字を

一字書くにしても、これに久遠の生命がある。我々が共に此の世の中で何事か立派なる事をして、人類の爲め將又國家の爲めに何か光輝ある事をなして、置けば、我々は死んだ後の久遠の生命は、何時迄も光輝を放つのである。而して其の光輝は後來千萬人、千億人の間に存在して、其等の人々に對して大なる活動をなしつゝ存在するのであらうと思ふ。其の希望を以て、現世に立てば多分大なる間違ひもなく行けるであらうと、私は確信するのである。

御奉公第一

次に御國體と國民思想にも述べた如く、何れの國、何れの民族でも、之れに主義者がなければ、到底平和を見る事は出来ぬ。此見解から云へば、革命の意義ある國家は、理想的の國家ではなく、人力を以て成立せし國家は、尙更である。何うしても人力を以ては如何とも爲し得ざる大靈力を有するもの、換言すれば、開闢以來君

臣の分定まり、臣を以て君となす事決してなしとの、大獅子吼をなす國家でなければ、眞の國家ではない。

豊葦原中國是吾兒可主之地也。

此簡單なる神勅には、種々の深刻なる意味合を含蓄して居るもので、遂に我國の如き世界無比の御國體となつたのである。又包容統一の意義に就いては、祈念祭の

祝詞に

「皇大御神ノ見霧ルカシマス四方國ハ天ノ壁立ツ極ミ國ノ退キ立ツ限リ青雲ノ靄ク極ミ白雲ノ墜リ座向伏ス限リ青海原ハ棹梶干サス舟ノ鱸ノ至リ留マル極ミ大海原ニ舟滿テ續ケテ陸ヨリ往ク道ハ荷緒結ヒ堅メ磐根履ミサクミ馬ノ爪ノ至リ留マル限リ長途間ナク立續ケテ狭キ國ハ廣ク峻キ國ハ平ケク遠キ國ハ八十綱打懸ケテ引キ寄スルコトノ如ク皇大御神ノヨサシ奉リ玉ヘバ、荷前ハ皇大御神ノ大前ニ横山ノ如ク打ち積ミ置キテ残リヲハ平ケク聞シメサム、」

とあつて、即ち包容統一の御趣旨である。また獻身的奉公の事に關しては『己カムキ〜アラシメヌ邪キ心穢キ心宮進メニ進メ宮勤メニ勤メシテ咎過アラシマハ』云々。

といふ祝詞が誠に良い教訓である。獨りこれのみならず神代を通じて、何れの點に關しても勸善懲惡の意義を十分に示してゐる。畢竟誠意を以て宮進めに進め宮勤めに勤めしめて、御奉公第一に毫厘も私心がなく、公事に勤勞すべしとの御主意に外ならぬ。取りも直さず日蓮上人が『宮仕へを法華經と思召せ』と仰せられたのと同義である。

また智仁勇の三徳は、三種の神器に關する御教で明瞭であつて、萬機公論に決する底の大御心は、既に神代の歴史に明らかである。併し天照太御神の素盞尊に對せられたる御様子、思兼の命の御事蹟、天の八百萬の神々の集會、武甕槌經津主の御勇武、大國主御親子の大義名分、封土奉還の偉大なる事業は、皆悉く此等の意

義を證據立つるものである。

清潔を尊む性格、罪障消滅の意義は禊祓の古傳によつて明かであるが、伊邪那岐尊の禊祓の禊祓を始め、大祓の祝詞にもある如く

『天下四方國ニ罪トイフ罪ハラスト科戸ノ風ノ天ノ八重雲ヲ吹キ放ツコトノ如ク』と。此れ優美にして寛容なる精神に満す人々の罪はミソギを以て拂ひ、清め、既に拂ひ清められたる上は、其罪人を見る事甚だ寛大であつた。此等の關係は誠によく法華經主義に合致し、唯一絶對の本佛を意識する如くに、無上絶對の神靈に對して起るべき自然の思想である。斯く言へば、如何にも解し難い様であるが、法華經主義は決して佛魔兩立の主義ではない。悪人が悪事を成すのも佛の作用である。譬へば、芝居の敵役の如く、其世間の舞臺に敵役として現はれたのであつて、其罪は素より悪むべきであるが、人としては決して悪むべきでない。人に嫌はるゝ所の敵役となつたのは誠に氣の毒な人である。従つて其罪をはなれ、ミソギを受けた以上は

決して悪むべきではない。大逆無道の提婆達多でも一念發起すれば、立派に成佛するのである。

されば王師に敵對するが如き所行あつても、決して之れを罵る様なこともなく、又外國人を目して犬戎だの夷狄だのと云ふ様なこともなく、凡て之れを尊敬する精神は、他國民には到底見出すことの出来ぬ所である。恰も普賢菩薩の如き面影を有するやうな觀があつて、彼の三十七八年戰役に於ても露國捕虜に對する寛恕なる處置の如きは、明かに我國民性を自然に發露したものであるまいか。

日本婦人の代表的上代の女性

又上代の我國の女性は夫を助けて大功を樹て、名を現はさしめたるは勿論夫の愛の爲めには一命を捧げて、水火も厭はぬ固い強い決心のあつたことは誠に感嘆の外はない。

夫婦の道を正されたる伊邪那美の尊の御事蹟を始め、情緒切なる須世理姫の御傳記、壯烈無比の御最期の如き枚擧の追がない。

須世理姫命は大國主命の御妃で夫命と共にあらゆる困難辛苦を遊ばされ、出雲國を開國なされたのである。

然し須世理姫命は誠に嫉妬の御念が強かつた。一體『嫉妬』は女性の美德であり又惡徳であつて、其程度が甚だむづかしいものである。大國主命は、御妃の嫉妬心の餘り深く烈しいので、『私は之れから木の國に行つて來る』とて家を出ようとせられた。其時、御妃は、命に深き心があるとは知られないが、門前まで、送られて、一首の歌をお詠みになつた。其れは、

『八千矛の神の命や、あが大國主こそは、男にいませばうちみる島のさまへ、かきみる磯のさきおちらず、若草のつまもたせらめ吾はもよ女にしあれば、汝おきて夫はなし。』

此歌によつて御妃のいぢらしき、切なる御情緒を知らせられ、流石の大國主命も大に動かされ給ひ、再び馬首を返して、木の國へ行かるる事を思ひ止まられ、此貞操の高き御妃と末長くお暮しになつたと云ふ事である。

此れは、須世理姫命の御傳記の一節であるが、此物語りに現はれた御妃の如きは、日蓮上人の「物に随つて、物を随へる」と云ふ精神を遺憾なく體現したものであると思ふ。

又橘姫は日本武尊に従ひ御東征の途に上られたが、駿河の焼津にて、尊が賊軍共の焼打にお逢ひなされ、既に御一命も危ふいところを、彼の草薙の劍の神威に依つてお免れになつた。その死生の境にあつても、橘姫の御身の上を氣遣はせられ、「姫は如何いたした」と左右の臣に御尋ねなされたとの事である。

此御恩愛を深く身に浸みて難有く思召された姫は、後日、尊の御一行が相模より房州へ海路を御取りになつた時、大荒れに遭遇遊ばされ、あはや御一同海底の藻屑

とならうとせられたのを御覽せられ、身を以て此難を救はんとせられ、

『いねいす相模の小野にもゆる火の』

ほ中に立ちて問ひし君はも』

といふ悲壯極まる御辭世の歌をお詠みになり、逆巻く怒濤の中に飛び込んで、尊の身代りにならせられた。何んたる壯烈な御最後であらう。姫は表面如何にも優しく美しく、花にもたぐふやうであつたが、内には鐵石をも鎔かすが如き情熱をふくみ、激流も漂はし得ず、猛火も冒し難き、凜然たる御心があつた。

日蓮上人の『矢の走るは弓の力、雲の行くは龍の力、男のしわざは女の力なり』と云ふは誠によく日本女性に對して溢るるばかりの同情と理解の言葉である。此御言葉と橘姫の御事蹟とは誠に好一對の女性美の真髓ではあるまいか。

斯くの如く立派なる教訓は古代史に充滿して居る。一つの飾なく、人情の至微を貫きながら、嚴然たる大典を其純朴なる傳説中に含め置かれたのである。

此外婚禮のこと女性のたしなみ、等に至つても、古典に於て充分なる訓戒が垂れられてあつて、殆ど凡ての方面に行き渡つて居る。即ち我日本には斯くの如き立派なる神ながらの道が存在して居たが、儒と佛との渡來によつて、從來の簡單にして、純潔なる教へよりも、何んとなき高尚なる理屈あるらしく思ひ込み、之れを賞賛する様になつたので、人情も漸次に錯雜となつたのである。此れ等は自然の趨勢の然らしむる所で、簡略より繁雜に入り、更に轉化して簡略となるのが當然の順序であるから、我國民思想界も亦此順序を造ふて變遷すべきものである。

併しながら殊に注意すべきは、現世執着の念の最も深き今日に、之れを救済すべきには、果して如何なる方法を講ずべきであらうか。夫れは立派なる大人格者の出でて、此現世を救済せねばならぬのである。

果して現代斯くの如き偉大なる人格者ありや否や。

此時に當り、私は痛切に日蓮上人の如き、積極的剛健主義を以て現世を救済す

るの適切なるを思ひ、日蓮上人を想望し併せて、其思想主義を普及し、救世の一助ともしたのである。

十一 婦人の自覺と日蓮上人の女性觀

眞似をするにも物による

諺にも『女の年始は三月』とい事があるが、女子は萬事控へ目の方がよい。お先走りは見ともないと云ふ意味である。

人より一足早く、人の氣付かぬものを用ゐるのは悪くはないが、兎に角お先走りは危険であり、滑稽が伴ふ事を忘れてはならぬ。

或る海軍士官が軍艦に火災配置といふものがあつて、咄嗟の場合に狼狽せぬ様になつてゐる。之れを結構だと云つて、早速自分の家庭に應用しようと試み、先づ其配置を作り、女中に讀んで聞かせた。——それによると、一旦火災の起つた場合、瀬戸物類は總て、井戸の中に入れる事になつて居つた。然るに其練習に際して、女

中は遠慮會釋なく之れを實行したので、練習を終つて見ると瀬戸物は悉く壊され其上井戸替をせねばならぬと云ふ騒ぎをやつたと云ふ事である。眞逆之れは實際の話ではないであらうが、畢竟何んの思慮もなく人眞似をすると、飛んだ失敗を起すこととなる。

或る人は西洋の便器を貰つて菓子器として、使用したとの笑話もあり、又西洋では日本の娼妓の道中姿の繪を見て、夫れを眞似て日本から態々帶を買ひ、之れを後前に締めて、人前に出て恥をかいたと云ふ話もある。

又、先頃佛蘭西に於て、一時立派な貴婦人達の間、外出の際、必ず小さな犬を連れて歩くと云ふ風が流行したが其際又例の虚榮心より珍らしい種類の犬を求め、事の競争が起り、一方には犬の斑点と同様の模様のある衣服を着るといふ事が流行し出した。何んたる滑稽事ではないか。

斯くの如く流行といふものには、傍觀すると斯かる妙なる、滑稽事がよくある。

又或時、私が學校よりの歸途、お伴を連れたる一人の令嬢に逢つたことがあつた。其令嬢の服装を見ると、白地の單衣を着て、如何にも華美なる紫色の羽織を重ね、夫れに膝の下まで垂れる様な長きフサ／＼としたるシヨールを掛けて居た。恰も冬と夏とが同時に來た様な滑稽さに、思はず吹き出したくなつた。斯る間違ひも畢竟するに物事を控目にせず、下らぬ真似をする處から起るので、やねふねや（屋根船屋）の看板の如く、何方から讀むとも間違ひの起らぬものならば好いが「やまかは」の如きものが、横に書いてあれば「山川」なるか、「袴屋」なるかは一寸判断を下す事が出來兼ねる。斯く物は萬事其場合々々に適應する様用ひねば、思はぬ滑稽を演ずる事になるから、餘程注意して、下らぬ真似をせぬ事である。

此等は一例に過ぎぬが、我日本の如きは今日迄の長き歲月を、歐米文明に憧憬して、其真似を成し來つたのである。商業上に、工業上に、或は軍備上に、教育上に至るまで、何事に依らず歐米先進國に學んだものである。而して此れ迄の日本とし

ては先進國に真似ると云ふ事は、止むを得ぬ場合にあつたのである。彼の徳川時代の末に太平の夢は黒船の爲めに破られ、此場合の日本は、恰も他の家々の早朝より起きて働いて居るのに、一軒の家丈が、晝頃に戸を開いて、急に騒ぎ出したかの感があつた。其處で歐米文明の模倣を始め出した爲めに、歐米人より「日本人は真似ることが上手だ」と言はれながらも、自己としても、猿の兄弟分のやうなる境遇に満足せねばならぬ羽目にあつた。夫れが國民の不斷の努力に依つて、漸々世界の一等國となり、又今度の歐洲大戦亂に遭遇して其永引くと共に歐洲文明の輸入不足の結果、國民の自覺を促して、此處に「日本は何時迄も、ヨーロッパの真似ばかりして居るべき場合ではない。日本は日本で早く、獨立せねばならぬ」といふ事が識者の間に宣傳せられ、「日本は日本で」と云ふ名實共に獨立せんと努力する様になり、他國の事物を模するのみではなくなつた。獨り精神上の方面のみならず、商業上に於ても。漸時日本一個の經濟界を開拓するに至つたのは、誠に喜ぶべき現象と云

ふべく、又此處に至つて始めて、一等國民として、肩身が廣くなる譯である。
然し一方五十年間の長き模倣時代の續いたる爲めに、外國のものでありさへすれば、何によらず模倣すると云ふ習慣が、一般日本人に普及されて居る様であるが、此習慣は残念な事と云はねばならぬ。誰々がヨーロッパへ行つて來たと云へば、直ちに其人を文明人である。豪い人であると云ふ傾向がある。舶來品と云へば、假令品質が實際悪いとしても尊いものとして、定めてしまふ。外國の習慣なりと云へば、何ものと謂も、立派なることとして眞似たがる。
而し成程、目に見る處は、凡ての設備に於て、歐米諸國は進歩もして居るが、其進歩して居るのは、何事も便利になつてゐると云ふ外觀上丈けのことであつて、其れが果して、精神的に於て歐米の文明は、如何程の價値あるや否やの點までも、考究して見ねばならぬ。表面も内容も、立派に充實したるものであつて、始めて立派なる文明と言ふべきである。

歐米諸國の文明は、表面は立派なものであるが、而し内容は、決して日本人の學ぶべき程の完全無缺のものではなく、寧ろ歐米人をして、日本に學ばしむる程、精神上の文明に至つては、遙かに日本の方が進歩發達して居る。
汽車、汽船、電氣、飛行機等の如き文明利機具ものは、まだ彼方のものを學ばねばならぬ。而し、文明の眞意義は、機械等の形而上の發達よりは、人間其ものの無形而上の進歩發達を主とするのは論ずるまでもない事である。
機械の發達は、開國年數の淺い爲めに、歐米諸國には劣つて居るが、人類其ものの進歩せる點に至つては、恐らく本來の日本は世界第一と云つても憚る處はない。現代の日本人は此點に着眼し、考究して見ねばならぬ。此點も考へず、唯だ一圖に歐米諸國の眞似さへすれば、よいものと考へ、彼地の缺點をも眞似る事があつては、例へば、金物商人の庖丁を奪つて、樹上に昇つた猿が、商人の眞似をして、其首を切つた昔話と同じ滑稽に陥るであらう。

下世話にも「梨の尻に柿の頭」と云はれる通り、物には夫れ、長處があるから一概に西洋の風を排斥する事も出来ぬが、又日本の古風を保守する必要もないが、唯だ日本婦人としては、古代から傳はれる、獨特の美しい風習だけは保存して貰ひ度いものである。

即ち何處迄も

敷島の大和心を人間は

朝日に匂ふ山櫻花

といふ味ひを失はぬ様にすることが肝要である。

物質文明よりも精神文明

私が語るまでもなく、歲月は無窮なるものであつて、斯かる無窮なる世界に在りては、百年、二百年位、何れが先に進歩したにしても、何程の事があらうか。自己

さへ確固として居れば、日本は決して歐米諸國を羨望する點は少しもないのである。努力さへ停止せざらんには、日本人と雖も必ずや其内に、機械文明上に於ても彼國より上位に越す事は疑ひもない事である、過去五十年の我帝國の歴史は世界に於て古今比類なき急速なる進歩發達其ものが、立派に證明して餘りあるのである。

而かも精神方面に於ける文明は、日本が遙かに先進國である。見よ。我日本は歴史上建國の古き點に於ては、エヂプト、印度、支那等の次位にあるが、其等の國は何れも滅亡し、衰亡して居るから、我日本は世界で一番古き歴史を有する國と云つてよい。紀元の點からも、日本は西洋よりも、六百六十年前である。斯かる古き往昔より萬世一系の皇統を戴き、又只一つの大和民族より成り、而も曾て一度も外國の侮辱を受けたる事なく、之れを歐米諸國の如き、與廢常なき國柄に比較すれば、如何に誇るとも敢て差支はあるまい。

此金甌無缺の國柄にあつて、而も日本家族生活程美しきものはない。日本の家庭

こそは眞に『人間』の家庭であつて、歐米の如きは、子供が年頃になつて結婚すれば、親子は大底別居するが、之れは親子が一緒に居ては、互に自由が制限せられるからのことで、之れを遠慮なく云へば、詰り舅や姑が、若い夫婦には煩さいからであらう。

之れを日本の如く、三従と云ひ『幼い頃には親に従ひ、長じては夫に従ひ、老いては子に従ふ』といふ婦人に比ぶれば、實に雲泥たゞならぬ差異があつて、育てられたる親が老いたる上は、其子は親を養ふのは當然のことである。老人が孫を相手に團樂する日本の家庭の美しさ、相勞はり、相助ける日本の家庭こそ眞の『人間』の家庭である。若い嫁にばかり都合よく解釋すべきものではない。

又歐米諸國に於ける夫婦關係は、非常に日本の夫れと相違の點がある。意見の衝突の場合等には、野良犬の如くに、互に毒づいて別居し、其を當然の事と心得て居る。甚だしきに至つては、互に利害問題に關する訴訟事件を起し、世間に其恥を晒

して平氣で居るが如き、之れを日本の婦人の嫁ぐ時に『再び親の家の敷居をまたぐ時は、死骸になつてから』と覺悟するのに比しては、何んたる相違であらう。人間は決して禽獸ではない。結婚は生涯の問題であるから、決して動物的に、夫んな簡單なる罵り合つて別れられる性質のものではないのである。

人間の自由を尊重するのは、誠に立派なる事ながら、此世には『節義』といふ文字があつて、何事によらず程度を越える場合には、勢ひ不道德に陥入るものである。

『自分の身を犠牲にして』徳義を守る事の出來得る日本婦人は、世界に一番優れたる婦人と云はねばならぬ。而して斯かる温情ある親子關係を有する日本の家庭は、世界に最も美しい、最も文明的な家庭である。

日本婦人の自覺を希望する

我國には往昔より親が子を思ひ、子が親を思ふと云ふ美談、夫妻相助けて、何事

か成し遂げたりと云ふ話、其他朋友の信義、さては敵を愛し憫んだる話、斯かる美しき物語は、枚擧に遑なき程である。

又主従の關係にありても、日本は世界無比である。諺にも曰く、主従三世と云ふ事がある。畏くも君臣の關係は百世萬世の永遠であるからと云ふまでもなく、主従三世の美しき節義、殊に赤穂義士の壯擧の如きは千古に輝く可きものであつて、身を捨て、主家の爲めに圖り、中には切腹してまでも、亦手打ちに逢ふまでも、尙其主を戒めたりした深き節義に致りては、恐らく歐米諸國民には、理解出來ぬ處であらう。斯く日本國民は、精神上に進歩して居る。

西洋人からは、日本人は不可解のものと云つて居る。敵打なり、切腹なりを普通と心得て居る日本人が、不思議なものである。現代には、昔の如き事實もないが、然し戦となれば、日本軍の強さは如何であらう。されば徒に文明なり、自由なりと叫んで居る様では戦ひには勝利を得られぬ。恐らく現代の物質文明より、

聽て精神文明に覺醒したる歐米人は、必ずや將來に於て日本の眞似をする様になるであらう。親子、夫妻、主従、強き義理と美しき人情との家庭、互に分を守つて、相助け、相勞はる日本の家庭に何の不足があるであらうか。

此世界に最優たる文明的家庭に育ちし日本人は、幸なるかなである。ヨーロッパにしる、アメリカにしる、何れの國民と雖も、眞の美しき家庭を作りたしと希望するものは、必ず日本の家庭を模倣せねばならぬ。此優秀なる日本人が、如何に過去の日本が模倣時代にあつたからと云へ、歐米の誤れる風習に囚はれるとは何事であらう。

私は日本の美しき家庭を誇りとすると同時に、特に日本の家庭の主婦たる人々に、此點を充分自覺して貰ひたい次第である。

ナポレオンと女流文學者の問答

昔、ナポレオンが勢力を揮つた得意時代以前の事であつた。佛國に革命が起つて、時の政府を倒さうと試み、盛んなる示威運動があつた。其の員中に、一人の婦人が居つた。其婦人は非常に大きな、相撲取りの如き女で、芋俵のやうに、ブク〜肥大つて居た。其女が頻りに、

『我等にバンを興へよ。國民は飢ゑて將に死せんとしつゝあり。』

と、叫んでゐた。之れを聞いたナポレオンは、

『お前は夫んなに肥大つて居ても、まだ肥大り足りないのか。此私を見るがよい。斯んなに瘦せて居ても、バンを呉れよなどは云はないぞ』と云ひ、聴衆を笑はせて不穩なる郡集を甘く取り静めたと云ふ話がある。ナポレオンは却々の諧謔家であつたと見える。又、或る婦人の文學者が、ナポレオンを訪問して、口を極めて彼れを賞讃した後、

『閣下は一體何んな婦人を最も愛せられまするか。』

と發問すると、『私の女房！』とナポレオンは無造作に答へた。文學女史は、當が外れて失望したが、尙ほ屈せず、

『それは當り前の事です。然し閣下は一體何んな婦人を最も尊敬なさるのでございますか』と疊みかけて、訊ねたが、又無造作に、

『私は、甲斐々々しく家庭の仕事をして呉れる女を、一番尊敬します』と。

女史は案に相違した彼れの返事に、大層失望し、何故に『貞淑な婦人を』とか『美しい婦人を』とか『文字のよく出来る婦人を』とか云はぬであらう。彼女は内心ひそかに自分を賞めて貰ひ度かつたのである。然し彼女は更に勇氣を鼓して、

『夫れなら閣下は女性の中で第一等と思召されるのは、何んな婦人でありませうか』と問ひかけると、ナポレオンは微笑を湛へながら『一番よく子を生む女』と答へた、之れには流石の文學女史も開いた口が塞がらず、早々に退却したとの事である。

ナポレオンは戰術に於ても、斯う云ふ風で敵の裏を衝いたので、連戦連勝したの

ではあるまいかと思ふ。然し其言葉は決して奇矯でもなく突飛でもなく、眞の婦人の行くべき道を遺憾なく語つて居ると思はれる。

之れは話ついでであるから附け加へて置く。近來、女權擴張問題等云ふ物騒なものが流行して、一部の人は女性の權力を高める運動を行つて居る様であるが、然し、男子と女子との間に、權力の問題が起るやうでは駄目である。元來男子と女子とは互に同情を以て相對すべきで、決して其間、何等權力問題など持ち出すべき性質のものではない。寧ろ女性は何處までも『物に随ふ』といふ事を離れてはならぬ先づ『物に随つて』然る上で『物を隨へる』心掛けが必要で、其處に女性美が發揮されるのである。

物に随つて物を隨へる覺悟

諺に『こゝみ女に反り男』といふてある通り、從來日本では、女は萬事控目に

して家の内に引込んで居り、男は外に出て萬事を切り廻すと云ふことになつて居るが、女の方は夫れが極端になり、随分氣の毒な事がある。

例へば『女人は大鬼神なり、よく一切の人を喰ふ。』といふ言葉がある。眞逆事實ではないが、然し一面の眞理は確かに道破されて居る。

『女は三界に家なし』の如き、随分心細き次第で、殊に五障三従と云ひ、女人は一生涯他人に従はねばならぬやうに、教へられ、

『天地の中に女人と生れざる事を第一の楽しみとす』と云ふに至つては、言語道斷と云つてよい。

日蓮上人は婦人の斯かる境遇を、非常に氣の毒に思召され、種々と婦人の肩を持つた言を仰られて居る。

四條金吾の女房に贈りし書簡の一節にも、

『日蓮、法華經より外は一切經を見候には女人とは、なりたく候はず。或る經

には女人をば、地獄の使と定められ、或る經には、大蛇と説かれ、或る經には曲れる木の如し、或る經には、佛種を熬れるものところ説かれて候へ。佛法ならぬ外面にも、わざはひは三女より起れりと定められて、候に、法華經ばかりに、此經を持つ女人は、一切の女人に過ぎたるのみならず、一切の男子に越えたりと見えて候。左衛門殿（金吾の事）は俗の中には、肩を並ぶものなき法華經の信者也。是れに相つれさせ給ひぬるは、日本第一の女人也。法華經の御爲めには、龍女とこそ、佛は思召し候はん。」と。

此外婦人に宛てたる書簡を繙くに、言々句句春の如く、時に秋霜烈日の如く、美しく、床しき限りを盡して居る。

『尼御前の御身として、謗法の罪の深淺輕重の義を問はせ給ふこと、まことに有りがたき女人にておはすなり。龍女に豈劣るべしや。我れ大乘の教へを聞いて、苦の衆生を度脱せんとは、是れなり。相構へて、力あらん程は謗法をば責させ給

ふべし。日蓮が義を助け給ふ事、不思議に覺え候ぞ』云々の一節の如きも阿佛房尼が、謗法の事を尋ねし際の返答である。此風雲を鼓動する底の大偉人にして、此美はしい半面のあつたのを思へば、益々崇拜の念措き難きを覺える。畢竟法華經では、極力女人を讚美し、味方をして居る。

女人を觀て、或る經文には、女人を地獄の使者と云ひ、又或る經文には、女人を大蛇と云つてある。斯かる思想は、果して日本在來のものであらうか。私は決して然うてはないと思ふ。即ち佛教や儒教の傳來せざりし以前は、男よりも寧ろ女の方が勢力があつた事もあるやうだ。佛法傳來の後も、聖德太子が法華經を弘められ、其全盛時代には婦人も救はれる道が開け、鬼神なり、蛇なりと云ふが如き、女泣せの思想はなかつた様に考へられる。

殊に古代に遡つては、日本の婦人も決して其の後の如くに無勢力ではなかつたのであつた。

彼の伊弉諾伊弉册二柱の神様が、相依り相勵まして、十分に活動された御有様は、今日に於ても明かに想像することが出来る。西洋では夫婦の活動が、第一神の意に背いて林檎を食べたところから始まつてをるが、其際、夫のアダムは妻のイヴの言葉に従つて罪を犯したのである。之れが歐米基督教諸國の男女夫婦の習慣風俗の源をなし、現今でも彼方では婦唱夫隨の風が行はれて居る。

日本は是れと反對に夫唱婦隨であつて、最初女神の伊弉册命の御言葉によつて天地の創造に着手されたが、其事業が何うも思はしく行かぬ。其處で一體如何なる譯かと、天神にお伺になると、

『女言を定めるに因りて良からず。』
といふ御告げがあつた。

されば、御婚禮の式から悉皆改めて、夫唱婦隨の風に定められ、漸次天照太神を初め八百萬の神々が御降誕になり、立派な御國を御建設になつたのである。され

ば、日本國では男女の秩序が既に建國の古から確固と一定して居つた。

昔天照太神は御弟素盞男命の荒々しき御振舞を御覽になり、之れは必ず善心ではないと仰せられ、何うかして戒めやうとお考へになつたが、荒々しい素盞男命の事であるから一通りでは其甲斐がない。種々御思案の末、先づ御髪をお解きになり、男の如く結び、八尺句穂の五百津の美須磨の球を以て身體を崇嚴に装ひ、矢の一ぱい入つた籠を背負ひ、弓を提げ、大地を踏み鳴らしつゝ、如何にも勇氣凜々たる御様子にて、素盞男命を詰問せられた。そのときの御模様が古書に斯く記してある。

「ソビラニハ千入ノ鞆ヲ負ヒ、五百入ノ鞆ヲ附ケ、伊都ノ竹柄ヲ取りハキ、弓ツエ振リ立テ壁庭ハムカ股ニ踏ミナヅミ、雷ノ如ク蹶ハラ、カシテ伊都ノオタケビ踏タケビテ。」

其勇壯なる御姿は、後世の巴御前や板額も遠く及ばぬ程であつた。

一面に斯く雄々しきところがあると同時に、他の一面には、極めてやさしくゆかしきところが有つた事は、天の岩戸にお隠れになつた傳説でも窺はれる。其當時の女性に決して消極的でなく、積極的の性格を具備して居る内に、淑やかな、女性らしき點があつた。日蓮上人の言葉の「女人となる事は、物に随つて物を随へる也」と云ふ言葉は、誠に味ふべき金言ではないか。此れこそ、我國の女性美の心髓であり、婦徳の根本である。

從順の裡に強くあれ

今萬葉集を繙いて見ると、古代の我國女性が、多く斯くの如き積極的の氣風に富んで居た事が明かである。

ますらをのさつやたばさみ立ち向ひ

時雨的形は見るに清潔けし
吾せこはものな思ひそ事あらば
火にも水にも吾なけなくに
右二首は何れも女性の詠つたもので、近世の女性に見るやうな柔弱な點は少しもないではないか。

吾せこはいづく行くらん奥つ藻の

冬張の山をたれか越ゆらん

之れも萬葉集に見える女性の歌である。

妻は家を守り、夫は外に出て働く有様がまざくと見えるやうである。而も其歌の調子が高い。之れは詠んだ女性の氣分が旺であつた證據である。然し彼等は決して西洋婦人の如くに差出がましくない。ちつと自分の慾を制へる自制心が強く、如何にも立派であつた。然るに近來の我婦人は漸次惡傾向を帯びて來て、或は西洋の

眞似をして極端に差出たり、或は極端に優柔となり、意氣地が減退した程である。政治の王政に復古した如く女性の、風習も昔に復つて貰ひたいものである。されば此時に當り、上人の女人に對する千載不易の大教訓を尙ほ一步進んで解説して見ようと思ふ。幸精神修養の一助ともならば、幸甚の至りである。

先づ第一は女子は須らく從順でなければならぬ。從順とは、嫁いだ上は、夫に逆らはず、夫の意志の儘でなければならぬ。又未嫁の間でも、素直にして、親の言語命令に反對してはならぬと云ふ事である。女子には此心が最も肝要事項であると説かれたが、上人は又決して、善事にしても、悪事にしても、親なり夫なりの命令なれば、『はい、はい』と何んの差別なく、從順にしなければならぬとは教へられてない。

一般の女子は、既嫁してから只夫の快心を迎へようと務めて、なるべく夫の氣に入るやうに、なるべく夫に叱られぬやうにと心配する婦人がある。之れは決して眞

の女子の盡すべき道とは云へぬ。

上人は此點を熱心に教示せられ、女子は男子に對して從順でなければならぬが、女子の出るべき所は、遠慮なく出て、夫を扶けて行かねばならぬと説かれてある。次の上人の言葉を見ても其根本の教示の意義が分るであらう。

『箭の走ることば弓の力。雲の行くことは龍の力。男の業は女の力なり。』

『男は柱の如く女は桁の如し』と。

箭が空中を走るのは弓があつて、弓の力で箭を放つからで、雲の行くのは、空に龍がゐて、龍が雲を起し、雲を進むるからである。此れと同じく、男の仕事は、決して男子の力のみでは充分の成功は出来ぬ、必ず女子の助力があつて、即ち男子の力と女子の力が合して、立派なる男子の仕事として現はれると云ふ意味である。

次に『男は柱の如く、女は桁の如し』とは、柱となるべき中心が、丈夫であつてこそ、桁も良くなるが、桁が良くなければ、柱のみでは充分の仕事は出来ぬ。柱と

桁とは同様に良きものでなければならぬ。其中心とも云ふべき柱は男子で、中心を扶けて、柱と共に仕事をすする桁は即ち女子である。

此の二教訓は、男女の本分を説かれたもので、男子と女子の存在の眞の意味が分かる。

箭には箭の特性がある。弓には弓の特性がある。箭と云ふ勇ましき男子が弓を放れて走らんとしても、弓と云ふ女子が、夫れに應じねば、五町飛ぶのも一町しか飛べぬ。夫れと反對に弓と云ふ女子が、箭と云ふ男子を扶けて、一生懸命に力を出せば、二町の所も五町、七町と飛ぶかも知れぬ。箭には箭の務めがあり、弓には弓の務めがある。箭と弓とが良き心懸を以て、相待つて始めて充分に走れるものである。

男子には男子の務めがあり、女子には女子の務めがある。此男子女子の務めが二つながら立派に揃つてこそ、男子の仕事が立派なるものとして表はれて来る。

換言すれば、男子には女子の出来ぬ仕事あり、女子には男子の出来ぬ仕事がある。

されば相互に譲歩して、缺陷を充さねばならぬ。此相互に持つてゐる力は、非常に大切なもので、男子にあるから偉い、女子にはないから駄目であるとは云へぬ。されば男子の仕事は偉大であり、女子の仕事は駄目とは云へぬ。此の理を充分會得して居れば、女子が男子に對して不平を鳴らしたり、夫婦喧嘩をするなどは、決して起らぬと思ふ。殊に近來、新智識を有する婦人方が、女子も男子も同じであるから女子も男子と同様偉いのだ。男子が偉く、女子が偉くないと云ふことは決してない。然るに世の中の男子は、女子を踏付けにして、男子のみ威張り散らすので、私達も此男子に反對して、大いに女子の偉い處を知らしめるなどと、世間を騒がす婦人もある様だが、此等は全然最初から間違つた考へと云はねばならぬ。上人の卓越した教訓を知る私共には却つて可笑しいやうに思はれる。

現在の仕事にしても、男子は男子の本分を盡し、女子は女子の本分を盡して居る

事が判れば、男子に楯を突き今更喧嘩をする必要もないであらう。而し若し、男子が男子の自分を盡さず、女子が女子の自分を男子に侵略せられたとすれば、男女共に、日蓮上人の教訓を今一度改めて讀む必要がある。男女の喧嘩を世間へ持ち出すのは、それから後のことで、妄りに、早まつて間違つた事をするものではないと思ふ。

夫婦相和する眞意義

以上で男女の意義は大略述べたが、要するに男子を中心として女子を扶けて行かねばならぬ。斯く云へば、直ちに男を扶ける意味は、男子に一步譲つた證據である。と力む婦人も居られようが、此處を再三再四熟考して貰ひたい。男子を扶けて男子に立派なる活動をさせるのは國家の爲め慶賀すべき事で、國家を代表する男を忠勇にするのであるから、考へようによれば、女子が男子を教育したとも云へる。然し

日本は、現代勝つたの敗けたの、教育したのと詰らぬ事を得意がつて居る場合ではなく、男子は男子で働き、女子は男子を扶けて立派なる男子を澤山造つて、世界に誇れる日本國を保持して行けば、其れ以上の事はないと思ふ。之れが女子の立派な務めであらうと思ふ。男子にして、女子が従順なれば、女子を征服したやうな馬鹿な心も起さず、唯だ女子の手傳ひに感謝するのみである。早い話が吾輩の如き軍籍に身を置く男は、何時國家の重大事件で出征せぬとも限らぬ。斯かる時に留守を委して、一番安心の出来るのは、従順な、心の強き妻である。若し我儘で理窟つばい妻でしたら、子供の教育、其他の事が氣に懸つて、戦場でも充分の奉公が出来ぬこととなるかもしれぬ。

又女子を中心として世間を改良するなどは、到底不可能の事で、飽くまで男子を中心として益々其中心を立派なる丈夫なるものとし、腐敗させぬ事に注意して行きたい。勿論男子は、男子自身で安全な中心の務めをして行かうとするのであるから

女子の手傳ひを豫期して居る譯ではないから、女子の手傳は、換言すれば特別のものである。自分の力以外に特別の助力ある譯で、男子としても嬉しいに相違ない。此處を日蓮上人は『女は男に依つて立ち、男を立てるものなり』と云はれた。男子によつて立つ女子は、必ず從順に相違なく、又男子を立てる女子は、必ず心の丈夫な、所謂内助の力強い、賢婦人に相違ない。畢竟女子は男子の力によつて世に立ち男子を尙一層男らしき男子となし、男子を世に立たせる力がなければならぬ。此女子こそ、始めて女らしき女子、日本の女子として、世界に誇ることが出来る。徒らに男子と女子は同權であると憤慨して、女子のみで自ら世に立たんとする婦人は、男子を倒す女子と云はねばならぬ。同時に自分も倒れる女子となるので、若し自分も倒れて、其上男子も倒すことになれば、此程不忠實なものはない。國家の爲めにも不忠實此の上なしである。されば女子が獨身で一生涯を送らんとするのは、實に馬鹿げた行である。『男子によつて立ち、男を立てる女』日本の婦人は、此立派な

る言葉を常に服膺して貰ひたい。

此處に婦人の爲めに、非常によい訓戒があるから一寸述べて置かう。

『日低ければ寛高し』と云ふ言葉である。

寛は、日が低いほど、高處に現はれるもので、其れと同じく、人は屈めば屈む程其徳は高くなる。之れと同理で妻が差出がましくなければ、夫れ丈主人がえらく見えるものであるから、此言葉もよく日常噛み締めて味はつて貰ひたい。

女人の成佛に就いて

日蓮上人の女性觀の大略は、前述の如くであるが、更に女人成佛に就いては、開目鈔に次の如く説かれてある。

『龍女が成佛此一人にあらず。一切の女人の成佛をあらはす。法華經已前の諸の小乘經には、女人の成佛を許さず。諸の大乘經には成佛往生を許すやうなれど

も、或は改轉の成佛にして一念三千の成佛にあらざれば、有名無實の成佛往生なり。舉一例諸と申して、龍女が成佛は末代の女人の成佛往生の道をふみあけたるなるべし。』云々と。

人間として此世に生れ出た以上は、男子であつても女子であつても、其の間に何等の障壁あるべき筈がない。皆一様に成佛往生し得るのである、彼の蟲蝶同様な龍女ですら、尙且つ成佛し得たのである。況んや普通の女性が成佛し得ぬ道理はない。世間では女子と小人とは養ひ難しと云つて、女性を賤しんでゐるが、然し慈愛は道の最上で、従つて此慈愛の觀念に富む女性は決して卑しむべきものではないと云ふのが、日蓮上人の女性觀である。

此點が他の佛者と、其所説の大いに趣きを異にして居る。彼の方便を以て説いた、方便經を離れて法華經の大本から見れば、此の觀念に到達するのは、蓋し當然であつて、釋尊の本義も要するに、之れに他ならぬのである。即ち法華經を誦讀す

れば、何んでも直ちにわかる事で、女性を卑しむ事は確かに釋尊の教義にも反したものである。

腹は借り物ではない

世間には『腹は借り物』と云ふ考へを以て女性を卑しむ悪い習慣がある。此事に就いて私が日頃痛切に感じつゝある事實の適例を擧げて、此誤れる思想を打破したいと思ふ。

一人の男子がある。此人が始めて妻を娶つて生れた子供は、悉く不出來で、單に精神上に於て許りてなく、肉體上にも誠に氣の毒な状態である。

然るに腹を異にした同じ人の子が、之れは何れも皆秀才である。未だ若年の事であるから將來は豫測し兼ねるが、前の小供が不具であるに拘らず、腹を異にした方の二三人は何れも學校で優等の成績を擧げて居るといふことである。此一例によつ

て見ても決して腹は借り物であると云へぬ、或は胤は借り物と云つてよいかも知れぬが、腹は借り物であると云つて女性を卑しむ事は出来ぬ。母の教育が其子供に大影響のある事は、必ずしも世間では否定せぬ様であるが、此處に擧げた實際の一例に徴しても、女が豪くなければ、到底立派な御奉公の出来る人間は生れぬ。此意味に於て大いに女性を尊重しなければならぬと思ふ。日本古來の思想から見ても、女子は決して卑しむべきものではない。中古に至つて輸入せられた儒學、並に佛教の方便經が誤れる思想を傳へて、女を無下に賤しきものにしてつたので、此儒者佛者共に女を世に立つ事の出来ぬものにした事は、全然我國古來よりの思想に反對したものである。然るに上人が佛者として、釋尊の眞意を傳へ、我國中古以來の積弊を改良する事に努力せられたのは、大いに感謝すべきことである。教は如何に尊くとも、之れを傳導する者が誤つた結果は、斯くまで恐ろしき弊害を齎す事となる。而して今日も尙ほ、動もすれば從來の誤れる思想の下に、女子自

久遠の生命終

身すらも自ら卑しきものと思惟し、敢て怪しまぬ様な傾向があるのは、實に慨はしい至りである。上人が、此點を以て、女子を救ふ教義の一大綱條とせられたのは、蓋し至當の事であると謂はねばならぬ。從來我國國民の思想に關しては、各方面とも悉く具備して居ると思はれるが、唯だ女人——女と言ふ事に對しては、中古以來誤れる思想を傳へて居るが、斯る思想は日蓮主義者としては取らぬ處である。終りに現代婦人に希ふ處は、以上述べたる上人の大教訓を充分咀嚼玩味して、積極的、活動的、生々したる婦人となつてほしいものである。如何にも女らしい、さうして日本の女らしい女になつて戴きたいのである。

387
264

終

